ました、梅の花が、花は申しませんけども、あなたが戀しそうに、一昨日、三つ咲きました、姉さんは、其を見るにつけても、菊さんが戀しくて、姉さんの、愚痴が、つひ涙がこぼれました。ほんとに近ければつひ行つて見たいに。

昨夜も今日はお節句であるからお花見に行きませうと隣りの、美代さんと、一緒に向の山へ、お重を提げて行つた樣な夢を見ました。

今度のお節句には、母さんと、一緒に、お出てよ、姉さんは、菊さんのお顏を見たら、どんなに嬉しいでしよう、そして夢に見たよか尙ほよい遊びを致しませうよ。

まだ申したい事は、たくさんありますけれども、最う何も申しません、只々始に言つた事を、よくお守り下さい姉さん一生のお願ひです』さよなら。

（評）いかに離れて居ても姉妹の情はかくもあるべし。

○活花會を友に知らす

本郷　朝井松子

文して申上參らせ候、扨昨日高濱先生より、「申入れ度き事有れば」との御使ひ有之候儘早速參上致し候處、兼々御噂承り居候若先生の御尊號御披露と高弟方三人の奥傳御許とを兼て明後八日より三日間伊勢平樓にて大會御催しの由、就ては例に寄つて門人一同挿花せよとの御申付けに御座候、委細は封じ置候心得書を御覽遊ばされ候はゞ御解りの事と存じ候儘くだ〳〵しうは申上候はゞね共、先生よりの御言傳に「杉浦樣には日頃の御手際を以て白と紫の藤を株分けにものし給ふやうに」と仰せられ候、又妾は牡丹か杜若をとの御差圖故もし杜若ならば水盤へ、牡丹なりせば籠活の積にて候、尙御目もじの上いろ〳〵御相談致し度き事共有之候へ共生憎今日は横濱の叔母が參り居候て何分參上致し兼ね候に付、もし御出席遊ばされ候はゞ挿花は明日夕刻迄にとの事に御座候間何時頃よりお出廻し遊ばされ候や、道順故お誘ひ申べく候儘一寸御返事きかまほしく御待ち申居候、先は取いそぎ申上參らせ候かしこ。

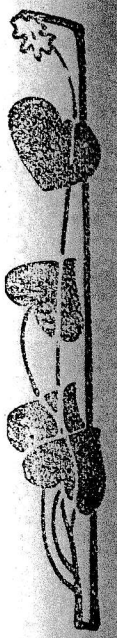
（評）文意明晰、趣味に富む。

○病後友に

記伊室井美那子

お見舞下すつて有難う、恰度約束でもしてあつたかのやう二十日目ですつかり快くなりましたの、けれど其間どんなにか苦しみ惱みましたらう、明けても暮れても陰氣な雨、偶々はれたつて曇てばつかり……だが病む者は幸ひですね、妾苦しみ惱んだ丈けそれだけ又悟つたとこあるやう思へてならないの、本當の病の中には神樣のみ意があるやうね、誰かゞ『覺めざる者は之によつて覺まされ既に覺めたる者は又之によつて瞑想の機會を得る』つて言つてるやう覺へますが、實に眞理だと痛切に感じました。之から活動します。

（評）想高し。



さとみやげ

服部貞子

柿の花

私は片足を石段におろしかけたまゝ、擴がらうとした洋傘の手も躊躇つた。

ほろりとまた、目路やゝ遠いところに響は消える、日かげの土の黑さを打つ音の、その幽かなのを、その床しいのを、どうしてこの足音に打ち消すことが出來やう。私は其床しい響を、聞き洩らすのを恐れて立ち窘んだ。

立つて居るのはわが實家の、頽れかゝつた裏門の石段である。苔蒸したこゝにも、葉かげの隈りは柿の花の、古さは濃い茶に、新らしさは白く、蕚の綠りに彩られて落ち散つて居る。

黑板塀に背中を合せて造られた一連の長家は、見るからにひさ苦しく、屋根の草も可なりに延びて居る。

壁の落ちかゝつた端の家の前の、いぢけた檜扇の咲きかけた井戸端には、中古の印半纏を着た男が後向きに蹲んで居た。研ぎものとは其體のゆらぎでも知れる。傍に置かれた手水鉢の水は白く濁つて居た。

柿の花は頻りに落ちた。もの靜かな晝である。

ふと目の前に人影が立つた。ひよろりとはして居るが、八つか九つ位らしい男の子、靑ぶくれた顏の眉毛は薄く、小さな目はどんよりとして何の働きもない。形の剝げた行丈の短い筒袖を着て、小さな其目でつくづくと私の顏を見て居る。何の積りか藁を嚙んで居た。

私も凝視て居た。暫くするとふら〳〵と柿の木の下を横切つて、研ぎものをして居る男の方へ行つて其前に突つ立つた。着物の臀が赤黑く汚れて居た。

男は一寸顏をあげたが、

「なんだ勝う……うゝむ？」

と氣のなさゝうに言つて、また兩腕に力をこめてごしごしはじめる。

二三日前まで、今は空家になつてる端の家に居た車夫の伜で、屋賃の滯りて逐ひたてられてからも、每日

ふら〳〵と遣つて來るということは昨日聞いた。馬鹿ておまけに無籍者だといふ。

晴やかな六月の日は額に熱くなつた。私はふと新町の伯母訪ふと出掛けたことを思ひ出して石段を降りた。

柿の花散る、柿の花散る！と歌になりさうな想ひを繰り返しながら、道を曲らうとして、またなんとはなしに振りかへつて見た。

——あゝあの子はまだ立つて居る。

お豐

雨は降る、降る。小褄はとつたが、駒下駄にはねあがる飛沫の素足なれば殊に氣持ちの惡るいこと甚しい。今少し小降りになつてからと婆はとめたけれども、俄に人ないところで靜かに考へて見たくなつたので、番傘を借りて暇をつげた。

裏口から裏口へと敷きつめた炭俵は、踏みこゝる度に濁水が浸みあがる。いつ晴れさうもない梅雨は、じわじわと傘を打ち、袖を濡らした。

婆は見送つて居る。と思ふと、其目に涙のあるのを知つて、婆を慰れむのか、お豐を悲しむのかはたまた我身を憐れむのかたゞなんとも知れぬ涙が胸にこみあげて來た。

檐には露切ると細引をひいて、桑が枝のまゝかけられてあつた。皆蠶室に行つたと見えて、母屋には一人の影も見えなかつた。廊下を通つて離れに入つたがそこも檐は桑のために暗い。大儀な軀を横へて私は吐息をついた。

今更にお豐の昔が思ひ出される。

お豐は私を姉樣と呼んで居た。年は二つばかり多かつたが、恐ろしく老成たところと無邪氣なところとのある女で、常にふい〳〵と面白いことばかり言つて人を笑はせて居た、其顏付手付がまた可笑かつたので、私はいつも苦しくなつて、腹を抱へては逃げ出したものだつた。

お豐は字が一字も見えなかつた。貧困つて困つて、貧窮り拔いた頃に育つたので、學校へもあげられず、十一の時から在方に子守にやられてしまつた。さうしてやう〳〵家に歸つたのが、確か十六位の時であつたらう、大きな中剃りと、眞黑い顏と、其言葉とは、暫らくの間笑ひの種となつて居た。その頃は、私の家でおろしてやつた資本ではじめた豆腐屋が、めき〳〵と都合よく行つて、兎も角も喰ふに困るやうなことはなかつたので、お豐もそれからは家に居ることが出來るやうになつた。併し一年の半分は私の家で暮したといつても宜い、此頃のやうな養蠶時の忙しい時は勿論さもない時でも、一日に一度や二度は必ずやつて來て、そしては人を笑はせて行く。尤も家は近かつた。

お豐はまた何でも眞似が上手だつた、芝居の眞似よし、源水の口上、人の癖でも何でもござれ、人が大笑ひするのを見て自分も喜んで居た。かくした女に誰も眞面目な相談を仕かける者はなかつたので、自然世の中の事情に疎い……といふよりは、すべての思想が極く幼稚だつた。

私はお豐が大好きだつた。お豐も私を好いて、私の言うことはなんでも感心して聞いた。喧嘩はよく毎日のやうにしたけれども、短い前掛をしめたお豐は、目尻の下つた兄の子を負ぶつて、すぐにこ〳〵とやつてくるのが常であつた。

お豐は緣が遠かつた、見事に發達しきつた肉體は徒

らに着物の行きを短くさせた。彼女も來年はもう廿三になります、と婆がよく母の前に首を曲げるのを見たが、其頃、人知れぬ戀に敗れて居た私には、大きな體をして子供を背負つて歩くお豐が、せめてもの慰めであつた。私は祖母の秘藏娘、その顏色を覗つて、思ふても言ひ得ない、爲し得ない義母の仕打ちが氣に入らず、拗ねて〳〵、數ある良緣も我から無茶に斷ち切つた。

新婚の人の変情ひ、情に驅らるゝ無智な男女の驅け落ち、こんなことが話題にのぼる度に、お豐はいつも皮肉な、腹の皮を縷らせるやうな茶かしを入れた。文字なき者の常として、其言葉は露骨に過ぎたけれども、悶へては人も呪つた其頃の私には、それが、何事かを復讐し得た時のやうな冷笑み泛ぶ心持ちに聞かれたのであつたが……お豐は家出した。或る夜お豐は或る男と手をとつて驅け落ちした。

出し抜かれたやうな腹立たしさに、私は其時お豐を信じて居た自分の心を嘲笑つた。いつともなしに胸に抱いて居た處女の矜り、其力の弱いのも知つて、間もなく私も平凡な生涯に入つた。

お豐の子は二つになつた。薄暗い佛壇の前にいんこして居ると、

「いかゞてせう？」

と前髪を持つて鏡を見て居る。

「相原さんて謂へば、あのお得さんが養子に行たんだつてねえ」

と私は其事を思ひ出して、鏡に云つた。

「はあ、あのさうなんですよ……」

と饒舌る用意に唾を一つ飲んで、

「なんだか此頃評判が惡るくつてねえ……旦那樣と出來てるんですつて」

すつ〳〵と手際よく毛筋を使つて、鬢の毛を結んてさげる。

「いやだ……オホ、、いくらなんだつて」

私は思はず失笑した。

「いえ、眞實なんですつて……」

と眞顏でちらと鏡を見て、

「あの奥さんが亡くなつてから、あとを二人まで貰つたつたんですがね、お得さんが極道つて居られないんですつて。その後の人は郡山なんですが亭主がね、あんまり道樂者なんて愛憎をつかしてこつちへ來たんださうですが、その通りだから一月と居られないんで

して、ちゆう〳〵澤庵を嚙つて居た子の、氣味惡るい程細い手足、ぷつ〳〵と腫物のふき出た大きな頭、思はず胎毒の恐ろしきに身を慄はしたが、婆は此子が可憐しいと指さして泣いた。一年目にぶらりと歸つたお豐は、腰のたゝぬこの子を置ざりにして、間もなくまた飛び出したといふ。

身内を環る不安、慵さ、味氣なさ、梅雨の欝陶しさは此身に堪え難い。

常ならぬ體故と人は言ふけれども。

卯の花垣

「何家へ？」

下梳のお仙ちやんが、荷物を前掛にまるめ込みながら膝をついて顏を見る。

「……相原さんに昨日あがらないてしまつたから……」

先で縺れて支へた毛を手をかけてひいて、

「少し順が惡るいけれども」

とすつとまた梳く。

お仙ちやんは出て行つた。横目で其後姿を見やうとすあ、さればつて夫婦の緣を切つて來たもの今更おめおめ歸られやしませんしね。あの何、大野屋……今大野屋のお針になつて居ますがね、私はあゝいう怜悧な娘に初めて遇ひましたつて言つてますよ。それは〳〵極いんですつて……」

ぎゆうと締めた元結を一寸嘗めてまた結ぶ。私はたゞ微笑んで居た。

「あのもと高久田から行つた陽一さん……とかいつたつけあの人は今矢つ張り米國に居るの？あの人と取り合せる積りなんてしよ」

「いえ、いえ、あの方はもうすつぱり緣が切れてるんですつて。今ぢや立派なお醫者樣になつて子供もあるさうですよ、大變彼國はお金になるんですつてねえ……」

て、今度は話が其方にうつるかと思ふと、また、

「なにゝしても評判ですからねえ、皆んなが言んですからねえ、まんざら嘘でもないかも知れませんよ……いつ行つても眞つ白くお白粉をつけて」

「だつてまさか……」

私はやつぱり笑つて居た。

取り合はないので一寸また鏡を睨めたが、頭に差して

た毛筋を拔いて、そのまゝ默つて髷を搔きはじめる。
鏡の面が暗くなつて來た。降るのかしら、と思ふ間もなく、雨呼ぶ風がさら〳〵と、竹の葉に鳴る。
「へえ前髮を……」
とやがて私の手に鬢搔きを渡した。

それから二日ばかり過ぎてのこと。
私は伯母の家からの歸り相原醫院の脇の道を通つたふと此間の髮結ひの話しを思ひ出して、背の低い、赫ら顏の、產科を得意としてゐる、時世後れの醫者と、同じ系の相原といふ、白い鬚の生へた士族の家に生れたお得さんとを思つて、彼樣な話は嘘だらうと思つた家の裏には、昔ながらの小さい石の祠に、色の褪めた赤い木綿の幕が張られて、それを圍んだ卯の花の垣は眞つ白に咲き亂れて居た。

「こい〳〵〳〵」
突然人の聲がする。今まで躊躇んでゝも居たか、垣根近くにすらりとしたお得さんが立つて居た。お得さんとは挿花の友達、きちんとした人で、いつも唇の皮が乾いて割れてる人だつけ、こんなことを思ひながら、私は一寸笑顏を見せた、そしてまた彼樣な噂は嘘だらうと思つた。
ころ〳〵と鈴の音を立てゝ、むく〳〵とした小犬が其足許に戲れて居る。
私は其犬が欲しかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

御不沙汰のお詫までに拙いものをお目にかけます實家に歸つてかれこれ一月、かうした筈ではありませんでしたが、祖母の主張で、實家と婚家との間に再三の手紙の往復、つひ身二つになるまでは其里にとゞまることになりました。蠶は今凹眠を覺めるところ、家內の者皆手古舞ひをして居ます。てはこれを里だよりの第一信とも。さよなら。

六月廿日　　郭公なく里にて、澄子

道子樣

新體詩

橫瀨夜雨先生選

凡て振假名をつくるところ賞は甲種の規定に據る

三等　○汝の爲に

阿波　長曾我部菊子

『汝の言葉は婦人の口によりて敎へられ、汝の涙は婦人の手によりて拭はれたり。汝のまさに死なんとする時にあたり傍に侍して汝が臨終の語をきくものも亦婦人なり』
（バイロン）

「七本櫻」を讀みて埋れ草の君をなつかしみはるかに月波根詩人のもとにささぐ。

野茨の花の散り敷く小河原の
石ころ道につまづいて
草に埋むる愛故に
胸をし柔すたまゆらは
再び夢の見えかへれ。
顏花の色とはいはず少女われ、
箱げば解る五尺の毛は有りながら
命なりけり一人ただ
遲れて侶無き野を往くも。

ああ野の花に見る紫の
雲鬟くてふ二並や
月波の山の下にして、人生を行くに
足なやむ君が旅路は長からん——
長からまし。

夢殿ごもる七媛は
袈と見しか、飜り來る
花に光なき苑にして
肩かす人もおはさずといふに。
思ふは出羽の海べより
雪ふりくらす冬までに
行かん常陸へと契りし
あくらの濱の埋み人
いつの日君に
否、七行く少女は終に行路の客なりき。埋れ草もまた行路の人なりき。帝笑す、汝すでに人の世を行くべき足を刪らる、なんぞ思ひの翼にのりて彼のあなぞらに翔らざる。汝の眼また病むときく、晴れがましき人の世の旋渦に眩せんより、仰いで天上に燃えさかる煉獄の火の白きを見よ。汝の心すでに平和を傷けられ圓滿をそこなはる、行け、最後の希望は汝を待てり。

四等　○悲しきヰオロン

東京　野村光子

雨の音のしめやかに
牡丹くづれし宵にして
寂しらに居しわが魂は
ゆかしき人の柔胸に
奏でられたる金玉の
絃の音色に溶け入りぬ

春の山行く七少女
七色色のあや被衣
留針を拾ひてかへせども
人は霞にまぎれ入る——と
哀音籠る井オロンに
涙こぼさぬ猛者は不知